俺の日常生活！

桂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の日常生活！

【Ｎコード】

Ｎ９２９９Ａ

【作者名】

桂

【あらすじ】

高校生の異常な日常生活です。パワフルです。

1日目：幼なじみ

いつもと変わらない朝、いつもと変わらない日。

今日もいつもと同じように高校へ向かう俺達。

…俺？俺は風見（かざみ）陣（じん）だ。茶髪（染めた）で短髪。軽く立ってる感じの髪型で、なかなかのイケメンさ！たぶん。身長は１７０…今年から１７でこれは小さ…

ゴンッ！

「あだ！」

「ちょっと、大丈夫！？～もう、ボーッとして歩いてるから電柱なんかにぶつかるのよ！」

こいつは俺の幼なじみの沙汰（さた）愛理（あいり）。結構仲の良い友達で、それ以上でも、それ以下でもない。髪型はセミロングで色は黒。顔は、一般人からかわいいと言われるような感じかな。俺は小さい頃から知ってるからよくわからん。そしてコイツ、なぜか俺より身長が２センチ高い！

「いや、ボーッとしてた訳じゃ…」

「まぁ陣が電柱よりモロイからしかたないかぁ。」

「どーゆう意味だ。」

「ダメ男って意味。」

おぃ。

「…あ！」

急に愛理が何かを思い出した様な顔をした。

「どうした？愛理。」

「確か今日学校休みだったわ！」

え？今日は水曜だよな？

「なにゆえ！？」

「トイレの工事でよ。知らなかったの？」

それだけでかよ！つーか何故トイレ工事！？

「連絡来てないぞ…てか、連絡網の俺の前は愛理じゃなかったか？」

「あ、忘れてた！イケネ☆」

愛理は自分の頭を軽く叩いた。なぜかはわからんが、スゴいムカついた。

「…まぁ、今日休みなら学校行っても意味ないし、家に戻るか。」

「あ、じゃーアタシも陣の家イコーっと！」

おぃおぃ、勘弁してくれ。とは言えない情けない俺…

トホホ…

―で、現在二人で俺の家にいます。

「おぃジンちゃん、麦茶おねがーい！」

遠慮ってもんを知らねーなコイツ…

「へいへい。」

言われるままに麦茶を取りに行く俺。

…あ、そうそう、親は今いないんだよね。親父の仕事関係で海外へ行ってんだ。だから一人暮しなのさ。

…お、麦茶みっけ。これを居間に持ってくのか。メンドイからコップとボトル両方持ってこー。

「ほらよ、麦茶。」

「おー、麦畑のお茶だね。」

いや、知らんから。

さて、コップにくんで…と。

「ほらよ。」

「お！気が利くねぇ♪」

じゃあ俺はテレビでも見るかな。

ポチッ

「いただきま～す♪」

ゴク、ゴク、ゴク…

コトッ

「ふぃ～やっと4分の1飲んだよ～。」

遅っ！アレだけゴクゴク飲んどきながらまだ４分の１！？
そう思って、愛理の方を見ると…
「…っておぃぃぃぃぃ！何でボトルの方飲んでんだよ！！そこのコップにくんでやったろーがぁぁあ！！」
「まぁまぁ、落ち着きたまえ陣くん。今のはアレだ…ノリだよ！」
うるせーよ！

―そんなこんなで、メチャクチャな朝（？）でした。

俺がテレビでいい〇もを見てると
「おぃジ～ン、お腹減ったよーう。」
と言ってきた。
コイツは昼飯まで家で食う気か？…まぁ良いけど。
「しゃーねぇな。…んで、何食いたいんだ？」

「テメーで考えろー！幼なじみだろー！」

無茶だろそれは。

「じゃあお前フリカケご飯な。」

「すいませんでした！パエリアが食べた…」

「ムリだ。」

「～チャーハンが食べたいです。」

まぁ、チャーハンなら良いか。

「わかった、じゃあ作るからちょっとまってろ。」

そう言って、キッチンへ向かう俺。

「ちょっとってどれくらい？１分？５分？１０分！？」

うるさい。

「いらないのか？」

「すいませんでした！」

フッ、俺の勝ちだな。

――――で、味付けして…と。よし、完成ー！
チャーハンを皿に盛り、愛理を呼ぶ。

「愛理、出来たぞ～。」

お？反応したか。バタバタと走ってきたぞ。

「おつかれー！そしていただきぃ♪」

あ、愛理のやつ、チャーハン奪って居間まで持ってっちまった…まぁ良いか。
俺も早く居間に戻って食うかな。

…で、居間に戻ったのは良いんだが…俺のチャーハンがないぞ？

「おぃ愛理、俺のチャーハンはどうした？」

「ふぃらふぁーい。」

…？

「知らない…って言いたいのか？じゃあ今、口に入ってんのはどう

した？」

…ゴクン！

「そこの皿から拾った。」

やべ、今何かが切れた気がするよ。

「あきらかに俺のだろーがぁぁぁあ！！」

「キャー！逃げろー！」

くそ、昼飯食い損ねた…

現在の時刻・６時過ぎ。

「あ～そろそろ暗くなるね。」

お？帰る気になったか？

「そうだな。日も落ちてきたし。」

「だね～。じゃあそろそろ帰るかな！親もうるさいだろうし。」

「じゃあ途中まで送ってやるよ。」

「お？アタシに惚れた？」

ふざけんな。

そーいや、愛理と俺の家は意外と近いんだよ。距離はたぶん３百メートルくらいだ。

今歩いてる場所は…ちょうど家と愛理の家の中間あたりだな。

「あ、この辺までで良いよ。」

「ん？そうか、わかった。」

「じゃあまた明日ね～！」

「おう。気ィ付けて帰れよ～。」

向こうが手を振ってきたんで俺も軽く手を振り、家に戻った。

「さてと…どうしたもんかね、これは。」

そう、さっき愛理が暴れたせいで居間がメチャクチャなんです。テーブルの上の部分が天井に刺さってたり、テレビのリモコンのボタンが全部取れてたり…

どんな状況だ！

「あいつを暴れさせたらダメだな……はぁ…。」

2日目：日常

トイレの工事も終わり、またいつもの学校生活が始まった。

―現在休み時間

「なぁ、次何の授業だっけ？」

俺は隣の席に座っている佐藤（さとう）　皆無（かいむ）に聞いた。

「え～と、数学じゃないか？」

「おぉそうか、わかった。」

数学なら寝てられるな…

？あぁ、皆無か？コイツは俺の中学時代からの知り合いだ。顔は意外と普通で、身長は俺より5センチくらい小さい。当然髪は染めてない。いわゆる真面目君だな。

キンコーンカンコーン

あ、始まったか…この時間がま～た長いんだよなぁ～

…あ、ついでに今2時間目だ。

今、先生が出席確認してる。

「え〜、佐藤…は休みだな。」

…あれ？皆無って、さっきいたよな。帰ったのか？

「先生、俺いますよ！」

あ、いたし！

「あ！スマンスマン、あまりにも陰が薄かったんでつい…な。」

いや、それはヒドイだろ！仮にもお前先生だろーが！！まぁ、俺も気付かなかったけど…

――う～ん…は！
ヤベー、今俺完全に寝てたよ…

「あ、やっと起きたー！」

あれ？何で愛理が俺の教室にいるんだ？コイツ３組だろ？
ちなみにこの学校は６組まであって、それぞれに４０人くらい居るんだよ。もちろん生徒がな。で、俺は４組だ。

…つーか今何時だ？

「……４時！？」

「何ビックリしてんの？アタシ変？」

知るかぁぁぁあ！つーか４時！？って驚いたのになんでお前の事になってんだよ！！

「ふぅ…帰るか。」

「え？無視ですか！？…ちょ、待ってー！置いてかないでよぉ～！！」

―で、今俺たちは二人で帰り道を歩いているとこ。
大通りなんで車が結構走ってるな…

「…じゃあ陣は2時間目からずっと寝てたの！？」

「あぁ。」

「うわ～、お前何しに来たんだよ。」

…！？今スゴい言い方しなかったか？

「お前どんなキャラだよ…」

「さぁ？表現できないキャラなのさ♪」

何コイツ……

「あ、そーいえば今日陣の席のガラス割れたよね？」

「俺、知らねーぞ？」

…そーいえばガラス割れてたかも。
あ、ついでに俺の席は廊下側（いわゆる端だな）の前から三番目なんだ。で、一番前と一番後ろにドアがあるだろ？その間は壁かと思いきや、ガラスなんだよ。と言っても、机の高さより上の部分だけだがな。ガラスも透明のやつじゃく、軽く曇ってる感じのだ。

「…寝ててもに気付くでしょ？普通。」

「わからなかった…」

「アホ？」

ぐはぁ！これは普通にキツイぞ…。

「まぁ良いわ。どうせ陣の事だからガラス刺さってても大丈夫だしね♪」

「俺はゾンビか？」

「…似てるかも。」

ふざけんな！

お～、この地獄からやっと救われるぞ！

何故なら俺ん家とコイツん家はこの別れ道で別れてるからさ♪

「じゃ、アタシこっちだから。」

「おう、また明日な。」

「うん、じゃーねぇ♪」

そう言って愛理は走って帰って行った…あ！コケた！

「……」

いや、そんな泣きそうな顔でこっち見られても困るぞ…

―自宅

「よっしゃー！無事生還したぜぇ♪」

明日もこんなだと思うと憂鬱だなぁ…

ピンポーン

インターホン？誰だよこんな時間に…

ピンポーン

「はいはい、出ますよ。」

ピンポーン、ピンポ、ピン、ピピ、ピンポーン

「うるせぇぇぇえ！」

俺はドアまでダッシュし、ドアを蹴り開けた。

「げふぅ！」

……！？

「か、皆無！何してんだお前？」

「お、お前に届けも…」

ガクッ

皆無ーーー！！

しばらくして…

「はっ！…ここは俺の部屋？」

「俺の部屋だバカ。」

「あれ？なんで陣…は！陣お前な～、普通にドア開けろよなぁ！！」

「いや、お前がインターホンで遊ぶからだろ。」

と、こんな感じの会話が数分続いた。

「…で、その届けものってなんだ？」

「あぁ、これだよ。」

皆無は懐から手紙を出した。つーかなんで懐から？いやまず、何でお前が俺宛ての手紙を持ってんだ？…まぁ良いか。

え～っと、誰からだ？

……親父！？

「おい皆無、これどうしたんだ！？」

「なんか帰り道に、変な帽子かぶったオッサンに陣の事知ってるか？って聞かれて、知ってるって答えたらこれを陣に届けてくれって言われて届けに来たんだよ。」

変な帽子…まさか…

「それどんな帽子だった？」

「何故か白黒の縞模様（しまもよう）で、妙に長いトンガリ帽子だった。」

それ絶対親父だーーー！！

何故ならあのオッサンは帽子マニアだからな。

てか、普通に会いに来いよぉぉお！！

俺より帽子か？帽子なのかこのヤロォォォオ！！

ふぅ…とりあえず手紙読んでみるか…

――親愛なる息子・陣へ

（何かキモイ！）

今日こっちへ一時的に帰って来たんだが、何か用事ができたんで家に帰れなかった。

（何かってテキトーすぎだろ！）

じゃあ父さんは帽子探しで忙しいからこの辺で。

（やっぱり俺より帽子なのか！？）

風見　才蔵（さいぞう）より。

ＰＳ．追伸

（いや追伸いらないから！ＰＳだけでオッケーだから！）

母さんには出張と言ってきた。帽子探しって言うとうるさいからな。

（完全にダメ男だな…）

…うん、やっぱ日本の帽子は良いよな♪

（いや知らねーよ！）

ビリッ！

「えー！？なんで破るの！？」

「破りたくもなるさ。」

「…いったいどんな内用だったんだろ。」

その後俺は皆無を見送り、部屋へ戻った。

「…ん？これホッカイロ…だよな？しかもココって…皆無がいた場所じゃん…」

……

はぁ……

アホばっか。

2日目：日常（後書き）

ガラスの事件は実際にありました。体育の授業中に…（^^；

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9299a/

俺の日常生活！

2010年12月10日07時03分発行